

山梨

015

令和七年度 山梨大学教育学部学校教育課程 幼小発達教育コース
推薦入試入学者選抜試験問題

(表紙)

小論文

注意事項

- 一、試験開始の合図があつたら、すぐに用紙の種類と枚数を確認し、受験番号記入欄の全てに受験番号を記入して下さい。

表紙	………	1枚
問題用紙	………	1枚
答案用紙	………	1枚
- 二、試験終了後、全ての用紙を回収します。
- 三、用紙が不足していたときや、印刷が不鮮明な場合には手を挙げて監督者に知らせて下さい。

この用紙(表紙)の裏面を「下書き用紙」として使用してかまいません。
下書きは採点には含めません。

受験番号

小論文

次の文章を読んで、あとの【問】に答えなさい。

活字になった情報は、手書きの文字より客観的で普遍的であるという印象を与えやすい。活字がもつそういう特性を背景にして、教科書という、書物のなかのひとつのジャンルが現れたともいわれる。教科書だから客観的真理が書かれていると受けとる読み手が現れる一方で、教科書であるから普遍的真理を書かなくてはいけない、と書き手が思いこみやすい条件が生まれた。

近代の学問と教育は、文字を書くことを中心にして組み立てられている。近代になって学問の中心をしめることになった「研究」においても活字文化の優位は顕著である。たとえば、研究の成果は、論文を活字にするという形で発表するのが学問のきまりであり、口頭発表は一段低く評価される。書くことが知的能力の証となる。「しっかり書ける」ということは、しっかり考えられるということだ」と、すでに17世紀にパスカルも断言していた。また、たとえば自然を研究することを比喩的に、「自然を読む」とはいつても、「自然を聴く」とはいわない。これも、聴くより読むほうが厳密な行為であるという考え方の反映であろう。

このような活字文化の普及には、情報へのアクセスを開放するという情報のいわゆる「民主化」と、知的思考の厳密化を助けうながすといった大きなメリットがあることは疑いをいれない。

しかし活字文化が支配的になるにつれ、一方で「声の文化」が抑圧されるという負の面もあらわになった。

「声の文化」とは、聴覚という狭い範囲だけにかかわるものではない。この言葉を通用させたW・J・オングによると、それは、生活世界に密着した文化であり、聴覚はもとより、触覚をはじめ嗅覚、味覚（もしかすると「第六感」までも含めて）などすべての感覚を使って、全身全霊で参加する性格をもつ文化である。これはたぶん、活字文化にとつぶりつかつて、頭だけで交流しあい、身体感覚がすっかり鈍くなった私たち現代人には実感しにくい文化であるかもしれない。むしろその性格・本質・可能性が今後の探究の対象となるような文化であろう。

ここであらためて問題になるのは、教育が、ある意味で伝統的に「声の文化」を重視してきた面があるということである。たとえば、「警戒に接する」といった聴覚的にかかわり、あるいは「人格のふれ合い」といった触覚的にかかわりの比喻で「真の」教育は語られてきた。教育はすべての身体感覚どころか全身全霊でかわりをもつ行為とみなされた。今ではそれほどでなくとも、微妙な知の技法は、文字を通してだけでは伝えられない、と信じている学者も少なくないであろう。

学問的探究の極意は、徒弟見習いのような身体ごと参加する状況でようやく伝授される。少なくとも伝授される可能性が生まれる。子供の認識の発達においても、身体ごと状況に巻きこまれる知の学習の重要性が見直され、認知的徒弟制といったテーマがとりあげられるようになったのも、このことに関連がある。

（出典：宮澤康人『教育関係』の歴史人類学…タテ・ヨコ・ナナメの世代間文化の変容』二〇二一）

（注1）「警戒に接する」⇨尊敬する人の話を身近に聞く、（尊敬する人に）お目にかかる

（注2）「認知的徒弟制」⇨伝統的な徒弟制の職業技術訓練にみられる指導方法を、学校などの学習指導に応用したもの

【問】傍線部にある「声の文化」として具体的にどのようなものが考えられるか例を挙げ、その特徴や意義を述べなさい。字数は、六〇〇字以上 八〇〇字以内とする。

受験番号

